

2時20分 平和記念資料館見学

2時40分 平和公園を離れる

映画、講演、見学をあわせて2時間余りの窮屈なスケジュールとなり、高橋館長との話し合いも不十分で、生徒にはもっと身近に聞いておきたいことが沢山残ったし、資料館の見学もまさに駆け足となってしまった。広島での学習についての生徒の印象、そして原爆体験をめぐっての総合学習の評価の問題は、Ⅲの田中論文

を参照して欲しい。

以下、今回の当研究グループの発表は、「総合学習の場としての高2研究旅行の試み」として、Ⅰ. 総合学習からみた研究旅行(徳井)、Ⅱ. 学習としての旅(白井)、Ⅲ. ヒロシマ体験と倫社での取り組み(田中)、Ⅳ. 英語を通しての試み(山田)、Ⅴ. 研究旅行における生徒の健康管理に対する認識(服部)、の5つのレポートから構成されている。〔田中裕巳〕

Ⅰ 総合学習からみた研究旅行

徳 井 輝 雄

1. 本校の研究旅行

本校では、次第に観光旅行化の途をたどりつつあった修学旅行を改革するため、種々検討の結果、昭和47年から現行の様な形態の「研究」旅行を行ってきた。

この改革のきっかけとなった時代的背景には、当時(昭和44年～46年)、学園紛争が高校においても起っていた事があげられる。さらに、社会的には、受験体制下にある高校教育に対する批判が非常に高まり「何の為の教育か」という問いかけがなされた事等があげられる。したがって当然の事ながら、観光旅行化した修学旅行に対しても「何の為の修学旅行か」という問題意識が、社会世論や教師、生徒の中にもあったのである。たとえば、教室の中だけの学習ではなく、校外学習の場や生徒の自主活動の場を与えよとか、人間同志(友人同志、生徒と教師)のふれあいの場が欲しいとか、いわゆる管理主義的な知育偏重教育に対する批判が吹き上げていたが、これが修学旅行をこれらの批判に応える場の一つとして再認識し再構築していかうという気運が盛り上がるきっかけとなったのである。

本校の高校の修学旅行は昭和47年以来現在に至るまで、次のような形態の下に行われている。

まず実施の10～6ヶ月前から生徒による研究旅行委員会を発足させる。この委員会は、旅行の目的地を決定する段階から、グループ研究の事前準備、現地での研究調査、事後の研究報告集の発行などの生徒の自主活動の中心となり、教師集団の指導はこの委員会を通じて行われる。目的地では5～10人位のグループに分れ調査研究活動が展開されるが、グループ研究の内容面への教師側の指導が、各教科の協力体制の下に行われるという事が少なく、引率教師(高2の担任団)にまかされ、今一つ深められない状態である。

2. 総合学習の場としてみた研究旅行

昭和54年度の研究旅行は11月12～15日に、萩、広島、大久野島(瀬戸内海)と展開された。本研究グループのメンバーが担任3名を占めていた事もあって、この旅行を、校外学習、グループ学習、自主的学習の場として活用を強化するため、総合学習の場としてとらえなおしてみる事にした。当初その総合性の発揮の方向は、1、ヒロシマの原爆資料館見学を通じて、核兵器・戦争について考えさせる。2、萩における研究活動を成功させる。3、これに見合った生活指導をする事でこの旅行を全体として研究旅行として成功させる。というものであった。

〈事前準備〉 上述の1がうまくいくように、主に倫社、英語の時間が使われた(Ⅲ、Ⅳを参照)。また生徒の自主研究の呼び水とするために、引率教師を中心に引率教師以外からの協力も得て、研究旅行の為の資料や旅行全体をうまく成功させる為の意見をまとめ、生徒の作製したしおりの中に掲載した。グループ研究の指導は、事前準備の仕方を各グループのリーダーに助言する程度に終わった。しかし、中には、自分達の研究テーマに沿って現地(萩)の関係者(市役所、商店、萩焼壺元等)に手紙を出したり、萩を知る為に名古屋市を再認識したり、萩焼を知る為に瀬戸焼を調べたり、松下村塾を知る為に現在の教育について考えるなどいくぶんかの活動はみられた。また図書委員は、図書館に研究旅行コーナーを設置し、萩、ヒロシマ、秋芳洞等に関係する文献をまとめておきクラスメートの事前研究の便宜をはかった。

旅行委員は旅行社との接渉や、教師集団と生徒集団との接渉を通して、旅行全体をうまく運ぶ為の旅行中の生活全般の計画も立てた。服装なども研究活動にふさわしいものとするとりきめを生徒全体に示した。大

久野島での夜の催物の演出も練った。

事前の研究を下調資料集にまとめた。松下村塾を調べたグループは、「松下村塾には規則はなかった。『規則がないからと言って自由放埒、禽獣夷狄に墮してはならず、老荘的放達になってはならない、誠実、忠直にして疾病艱難には扶け合い、力役事故には一致して一身の手足の如くふるって労役するべきである』これはわれら名大附にそのままいかえる事が出来るしこの旅行に関しても言えることである」と紹介し、本校の校風の「自由」について思いをめぐらした。

〈現地では〉萩はみそれまじりの荒天であったか、体験的学習は出来たようである。萩の市民との交流を通じて生徒一人一人の総合力かためされた。事前準備とのズレへの対処、グループ内に病人が出た時等も良くも悪くも生徒の「日頃」が出た。十分成果を得たグループ、チームワークや事前準備が悪く成果を得られなかったグループ等その研究成果はさまざまである。

広島での原爆資料館館長の高橋氏の話に数多くの生徒は深く打たれたようである。或る生徒は研究旅行の感想文の中で「『戦争とはなまやさしいものではない、あんなものにあこがれをもってはいけぬ』と言われたその言葉の一つ一つに重みを感じられた。あの広島でみたものはこの先ずっとぼくの胸からはなれないだろう」

〈研究のまとめ〉 研究報告集を出した。引率教官も感想文を寄せた。それ以外の事後指導は全く行われなかった。

3. 総合的指導はできたか

この研究旅行の反省を総合学習の場としてどう活用したかという観点から行なうならば次のような事がいえる。

総合学習の場として旅行をとらえる事で、引率教師の旅行への指導方針かできた。(たゞ旅行を事故もな

く無事に終えるというだけでなく)だがその方針は漠然としており、何もかも識り込んだだけで、浅く広いものになってしまった。

事前準備の段階で、授業中に旅行に関係した内容を扱ったのは、ヒロシマに関する事のみであったが、これを中心として、たとえば、この萩—広島—大久野島と展開された研究旅行を総合学習の場としてさらに深くとらえるために、日本の軍国主義的歴史の認識あるいは平和探求の旅として一貫した大テーマの下に位置づける事ができたのではないか。吉田松陰の思想は明治維新では尊皇攘夷として、その後は富国強兵として受け継がれ、その帰結が大久野島での毒ガス作りであり、ヒロシマに投下された核兵器である。この萩(松下村塾)—ヒロシマ(原爆資料館)—大久野島(毒ガス工場や毒ガス貯蔵庫跡)という事物を通じて、日本の軍国主義の発生からその帰着したところをあとづけ、さらに現在の状況を鋭く分析する事ができたのではなからうか。学習の形態としては、萩の自主的グループ学習からヒロシマでの教師主導形そして大久野島でのレクリエーションというアクセントをつけ、また生活指導の面では、萩での社会人としてのあり方、帰属する自己集団と他集団との関係、大久野島での自己集団と個人との関係を体験する場としてとらえ、それに適した指導内容が考えられた。これらの系統性を有機的に結びつけて総合化していく事が客観的には要求されていたがそれが明確化されないまま実施日をむかえてしまった。

総合性とはあれもこれもではなく、総合性を何にむけて発揮していくのか、その「何か」を明確にする事が大きな課題である。

すなわち修学旅行を総合学習の場としてとらえる場合まずその総合性を発揮するテーマは何かを、そのコースにあわせて調査研究する事が最初のそして最大の課題となるのである。

Ⅱ 学 習 と し て の 旅

白 井 宏

実際に旅をする生徒達の意識とは大きく食い違っているであろうことを承知していながらも、高校2年生の“修学旅行”を、“研究旅行”とする。生徒の意識と食い違っているということ自体は、恐らく誤りではないだろう。その食い違いを埋めて行く作業が教育、そういう定義も成立し得るからである。

事 前 に

生徒の意識を高めるというよりも、それと折れ合う形で、コースや日程が決まる。

旅行の中心になる萩における丸1日のグループ研究については、全体が21の班に分かれ、それぞれが研究